広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXI 2009. 3. 22

現在のイタリアにおける中学校音楽科教科書に関する研究

－教科書の構成と内容に着目して－

大野内　愛
（本講座大学院博士課程前期在学）

1. 研究の動機と目的

イタリアでは1962年，「国立中学校の設立および規則」[1] が制定され，音楽科が中学校に必修科目としてはじめて取り入れられた。現在イタリアでは，中学校3年間を通じ，音楽の授業が週1～2時間程度，設けられている。日本の「学習指導要領」にあたる教育内容の規定[2]は，具体的な内容が示されているというよりは，最終的な達成目標が示されているにとどまり，実際の教育内容については各学校に委ねられているといえよう。教科書についても，価格の規定はあるものの，内容についての検定はなく，各出版社が各々に，独自の教科書を出版している[3]。この教科書の選定も各学校に任されている。

本研究では，イタリアの中学校で実際に使用されている音楽科教科書の構成，および内容を明らかにすることを目的とする。

2. 対象とした教科書

本研究では，イタリアで大きなシェアを占めるDe Agositini社から出版されている中学校音楽科教科書 *Rondo*（2004）を対象とし，分析・考察する。本教科書は，イタリアの中学校で使用されている教科書の中でも，国の示す指針に沿った教科書の構成がなされていることが特徴である。

3. *Rondo* における学習活動

イタリアの音楽科教科書における主な学習活動は，「歌唱・器楽」「聴取」「創作」「音楽理論の学習」「コンピュータ実習」の5つに分類することができる。本教科書における学習活動別の単元数を図1に示す。

図1によると，「聴取」が約7割を占めている。聴取活動が多いのは，「音楽史」「音楽の形式」「音楽のジャンル」などの内容について，聴取を通して学習するためである。次に多いのは「音楽理論の学習」であり，演奏や聴取といった音楽的活動をおこなうことなく，音符や記号の名称を学習することが主な内容となっている。日本においてもっとも多い活動である歌唱や器楽は，本教科書においては約1割にとどまっている。

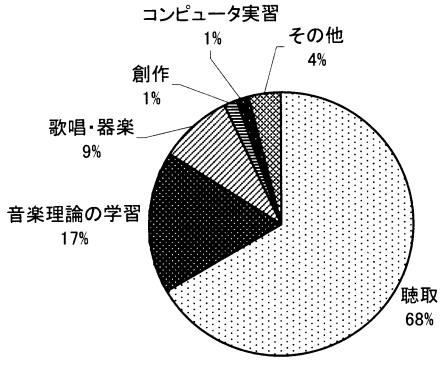

図1 Rondo における学習活動の割合

「その他」では，「聴覚器官の構造」「音の公害」「音の伝わり方」などが内容として示されている。文章や図によってその内容を理解することが求められており，特に他の活動を含まない。

[1] 正式名称は「1962年12月31日 法律第1859号」（Legge 31 dicembre 1962, n.1859）
[2] 2007年にイタリアでは「幼児学校および第1階梯の教育カリキュラムにおける指針」（"Indicazioni per il curricolo per la scuola dell'infanzia e per il primo ciclo d'istruzione"）が示された。
[3] イタリア出版協会AIE（http://www.adozioniaie.it/）によると，約70社の出版社が音楽科の教科書を出版している。

4. *Rondo* にみられる教科書の構成

Rondo は，A（理解のための聴取），B（音楽の演奏と基礎）の2冊から成り，発展的な内容を含む副本として作品聴取用ワークノート（Serata dell'opera）および，歌唱教材集（Le più belle canzoni）が付属している。

イタリアの教科書においては，「主題による題材構成」が主であり，学習内容に即した活動が行われるようになっている。したがって，ここでは教科書に示された学習内容を，各章ごとに記されている「概要と目標」および，参考として掲載されているコラムの内容を中心に概観する。また，作品聴取用ワークノートおよび，歌唱教材集については，扱わないこととする。

(1) *Rondo* A の学習内容

Rondo A は4つの章から成り立っており，そこに示された内容について，楽曲の聴取をおこなうことを中心に，学習する流れとなっている（表1）。ただし，聴取活動のみで学習をおこなうわけではなく，聴取した楽曲の主題の部分などを歌唱・器楽演奏で再現できるよう，その一部分の楽譜が掲載されている場合もある。この場合，演奏自体が目的ではなく，アナリーゼの手段として用いる。

表1 Rondo A（理解のための聴取）の構成

部	単元
第1章 主題	単元1：音楽の力 単元2：世界の動物の声 単元3：運動と踊り 単元4：誕生 単元5：感覚と感情 単元6：自然 単元7：夜の音 単元8：英雄，勝利，戦争 単元9：共同生活 単元10：生活の中での感情
第2章 形式	単元1：語り合いの一部分 単元2：単一性と多様性 単元3：対称な形式 単元4：繰り返されるモチーフ 単元5：メヌエット 単元6：変奏曲 単元7：持続音 単元8：対位法 単元9：フーガ 単元10：ソナタ形式
第3章 種類	単元1：音の対話：ソナタと協奏曲 単元2：交響曲 単元3：劇場音楽 単元4：バレエ音楽 単元5：映画音楽 単元6：音楽とテレビ
第4章 歴史	単元1：古代文明 単元2：教会と城 単元3：ポリフォニーの時代 単元4：ルネサンス 単元5：1600年代 単元6：1700年代前半 単元7：地方の時代の音楽 単元8：ロマン派 単元9：国家の学校の時代 単元10：1800年代と1900年代の間 単元11：20世紀 単元12：ジャズ 単元13：カンツォーネ

（Merlo, B., & Taramini, G., *Rondo*A, De Agostini, 2004. より筆者訳出）

①第1章「主題」について

〔概要と目標〕
音楽は人間の生活におけるさまざまな経験を伝えられるものである。音楽は「動物」「夜」「自然」といった外の世界や，感覚，感情，心の状態といった内面の世界を表現することができる。この章では音楽を聴いたり練習したりするという行程をとおして，そのようなことに気付くことを目的とする。

（Merlo, B., & Taramini, G., *Rondo*A, De Agostini, 2004, p.4 より筆者訳出）

第1章では，生活や人生に密着したテーマに沿って音楽を聴取するようになっている。外側のできごとだけでなく，内側にある人間の感情などが，どのように音楽に表されているのかを理解することを目的としている。それによって，音楽がいかに人間の生活や人生に近い存在であるのかということを学ぶことができる。

コラムにおいては，その単元で挙げられた楽曲に，表現されている事柄が類似している，または異なっている他の芸術（詩，絵画，建築，彫刻等）を紹介している。また，その楽曲の理解を深めるために，比較に適したそのほかの楽曲を紹介している。

②第2章「形式」，第3章「種類」について

〔概要と目標〕
音楽の形式や種類の特徴が発見できるような楽曲を聴くことで，それらについて，より深く理解する。この章では，楽曲の聴取により，単純なものから複雑なものまで，その要素を理解し，分類することを目的とす

る。さらに，その他の音楽のさまざまな特徴をみる。それらを理解することで，音楽を聴取したり比較したり，楽曲を練習したりすることが容易となる。

（Merlo, B., & Taramini, G., *Rondo*A, De Agostini, 2004, p.4 より筆者訳出）

第2章，第3章については，概要と目標が1つにまとめて示されている。

第2章では音楽の形式，第3章では音楽の種類を学習し，それがより顕著に現れている楽曲を聴取・分析する。目標にも書かれているように，音楽を聴取することで，その特徴などについて理解を深めることを目的としており，楽曲自体のよさを味わうといったことを目指しているわけではない。

③第4章「歴史」について

〔概要と目標〕
時代によって音楽家の創造や表現は変わり，作品の構造も変化してきた。この章では，読み物をとおして，音楽を理解し，音楽の歴史を概観することを目的とする。左のページには，歴史の中での音楽の話を掲載し，右のページではより知識を深くすると考えられるコラムや新しい情報などを掲載する。

（Merlo, B., & Taramini, G., *Rondo*A, De Agostini, 2004, p.5 より筆者訳出）

第4章では，時代によって変化してきた音楽の歴史について，関連する楽曲を聴取する。また，音楽史に絡めて，その時代の詩や絵画についても適宜紹介されており，音楽とのかかわりについても触れることができる。目標の記載によると，特に文章を読むことによる理解が中心となっている。多くの聴取曲が紹介されているものの，聴取についての記載は見られない。つまり，ここで扱われている聴取のための楽曲は，文章で示された内容についての理解を深めるためのものであるということ，あるいはその時代の音楽に触れるという目的であることがわかる。

コラムにおいては，その時代を理解するために，歴史上重要な出来事を示し，時代の雰囲気を感じられるようになっている。また，作曲家の歴史的背景や，その時代の音楽的言語の特徴の紹介，同時代の他の芸術の紹介などを掲載している。

(2) *Rondo* B の学習内容

Rondo B は3つの章で成り立っており，主に演奏をおこなうための基礎的な学習や，演奏のための楽曲が示されている（表2）。

表2 *Rondo* B（音楽の演奏と基礎）の構成

章	単元
第1章 語法	単元1：長さとその記譜 単元2：高さとその記譜 単元3：調子、速度、ダイナミクス 単元4：拍子と寸法 単元5：8分音符 単元6：16分音符 単元7：付点とタイ 単元8：3連符、不規則音符、シンコペーション、あと打ちリズム 単元9：混合テンポ 単元10：音程と音高 単元11：調 単元12：調性 単元13：和声
第2章 音の工場	単元1：音の科学 単元2：私たちの周りの音楽 単元3：楽器の不思議な世界 単元4：撥弦楽器 単元5：打弦楽器 単元6：擦弦楽器 単元7：音管に送風する楽器 単元8：口をつけて吹く楽器 単元9：リード楽器

①第1章「語法」について

〔概要と目標〕
音楽は言語であり，どの言語も文法や文体システムをもっている。この章では，「音楽の演奏」をしうる道具（楽器）を用いて，音楽の言語について知り，学ぶことを目的とする。また単元では遊びや練習を段階的におこなうことをとおして，音楽の言語の概念を学習する。

（Merlo, B., & Taramini, G., *Rondo*B, De Agostini, 2004, p.4 より筆者訳出）

第1章では，単元ごとに「理解のための練習」として歌唱・器楽用の楽譜が付属している。たとえば8分音符の単元であれば，8分音符の練習に適した楽曲が練習用に掲載されている。そうした練習をとおして，音楽という言語の文法を理解することを目的としてい

る。「段階的に」という指示があることから，単元1から順に学習することにより，音楽の語法が習得できるといえる。

	単元10：マウスピース楽器 単元11：打楽器 単元12：電子楽器 単元13：複雑な音楽 単元14：オーケストラ 単元15：音楽とコンピューター
第3章 器楽と歌唱	単元1：私たちの声 単元2：私たちのオーケストラ 単元3：音符を演奏する 単元4：音符を歌う 単元5：伴奏 単元6：音楽の創作 単元7：私たちのオーケストラのために 音から音楽へ 単元8：歌曲集

（Merlo, B., & Taramini, G., *Rondo*A, De Agostini, 2004. より筆者訳出）

②第2章「音の工場」について

〔概要と目標〕
この章では，日々の生活に散りばめられた楽音や騒音に着目し，「音楽的に聴くことが可能にされたもの」の要素を理解する。また，機能や音，特徴など，楽器のもつ驚くべき世界を学習する。

（Merlo, B., & Taramini, G., *Rondo*B, De Agostini, 2004, p.4 より筆者訳出）

第2章では，主に単元で示された楽器や演奏形態について，それに適した楽曲を聴取することによって，学習するようになっている。また，楽音と騒音の違いにも触れ，楽音としての要素を理解できるようになっている。音の出るものにはどのようなものがあるのかを学習した上で，さまざまな楽器に触れていることから，音というものを段階的に学習できる構成になっているといえる。

③第3章「器楽と歌唱」について

〔概要と目標〕
リコーダー，ギター，鍵盤楽器を演奏したり，歌唱したりするためのメソードを身につける。単純な練習からはじめ，早く曲の演奏にたどり着けるよう，段階的に声や楽器のスキルを学ぶ。練習の際には，CD伴奏を用いる。

（Merlo, B., & Taramini, G., *Rondo*B, De Agostini, 2004, p.5 より筆者訳出）

第3章では楽器（リコーダー，ギター，鍵盤楽器）の運指や奏法，発声器官の学習や声の出し方など，実際の演奏のための基礎を，練習曲を用いて学習する。最後には，教科書Aで扱った楽曲なども含めた「作品集」が掲載されており，器楽および歌唱のどちらでも用いることができる。練習の方法としては，CDによる伴奏を用いるよう指示されている。このCDとは，掲載されている各練習曲について，ベースやドラムでポップス調の伴奏が吹き込まれているものである。CDは教科書に付属しており，学校で全員そろって練習するだけでなく，自宅でも1人でこのCDを用いて練習することができる。

5. Rondoにみられる音楽科教科書の特徴

イタリアの音楽科教科書は，学習内容を中心として構成されており，各単元の学習内容に沿った聴取教材や歌唱・器楽教材が掲載されている。

*Rondo*では，中学校3年間を通じて教科書A・Bの内容を学習する。ただし，Aが終わったらBに進むといった使用方法が求められているわけではない。たとえば，Aの教科書での学習内容に関連した楽曲が，Bの教科書に楽譜として記載されていることもあり，聴取をおこなうことを中心とするAの教科書と，演奏することを中心とするBの教科書を，関連させて使用できるようになっている。つまり「音楽史」「音楽の形式」「歌唱・器楽演奏」など，各章の中ではそれぞれまとまった単元構成がなされているが，章の並びについては，学習の順序を示唆しているものではないといえる。章のならびで学習を進めてしまうと，学年によって学習活動が偏ってしまうと思われるからである。したがって，教師は学習の順序を工夫する必要があるといえるだろう。ただし，教科書Aの第1章「主題」においてみられるように，*Rondo*の冒頭の部分には，「音楽は常に何かを表現しているものである」という，教科書全体をとおして貫かれている考え方が示されている。このことから章のならびは学習の順序を示しているわけではないが，音楽科の授業の入り口としては，教科書Aの冒頭にあるこの章を学習するのが望ましいという考えのもと，教科書が構成されていると考える。

音楽理論の学習に関しては，初歩的な内容である，音符の名称などから学習することになっている。このことから，中学校音楽科教科書自体は，小学校での学習内容との関連があるとは考えにくい。日本においても，音楽科は各小学校で習得している知識が異なるため，中学校では，ほぼゼロからのスタートになりがちである。そのことについて，イタリアにおいても同じような傾向がみられる可能性がある。それは，国の示した指針において，曖昧な内容しか定められていないからであると考えられる。

歌唱活動に関しては，本教科書ではあまり多く扱われてはいない。歌う姿勢や発声器官といった基本的な事項についての説明はあるものの，実際の楽曲を用いた演奏方法などについては記載されていない。したがって，歌唱活動については，教師の裁量に任されているといえるだろう。

器楽に関しては，リコーダー，ギター，鍵盤楽器に関して，「Sol」の音で1ページ，「La」の音で1ページというように，1音ずつページを割いて運指などを掲載しているため，量としては非常に多い。コードで演奏するための練習や，そのための和音の転回の学習など，内容は充実している。特に指導者がいなくとも，それぞれの楽器の演奏技術を身につけることのできる内容である。

演奏については，声の出し方や，楽器の音の出し方，運指は学習するが，楽曲を演奏することによって音楽的表現を学ぶということはなく，演奏技術の向上のほか，アナリーゼの手助けや，ある時代の音楽を体験する，といった目的で行われることが多い。そのため，歌唱・器楽の単元は，演奏における表現能力を高める目的で存在するわけではない。したがって，イタリアの音楽科教育においては，実技に重点を置いているとはいえない。

本教科書では，多くの学習内容を，聴取活動によって学習する構成となっている。表現活動による学習を重要視する日本とは異なり，イタリアでは音楽の聴取による学習に重点を置いているといえる。聴取の後には質問項目が記載されており，選択肢が準備されているものもあれば，記述式のものもある。いずれにしても，その単元の学習内容につながる質問項目が準備されている。しかし，各章における概要と目標にみられるように，その楽曲自体の「良さ」を味わうことや，情景をイメージすることなどが求められているわけではなく，知識の習得という観点から聴取をおこなうようになっている。具体的には，「種類について理解する」「特徴をみる」といった記載がなされており，聴取がそのための手段としてのみ扱われていることがわかる。

6. おわりに

今回は，*Rondo* を取りあげて，構成とその内容について概観してきた。その結果，音楽は人間の生活や人生に近いものであるという前提のもとで，音楽科の学習が行われていること，教科書の章立ては，順を追って学習する構成にはなっていないこと，聴取活動に重点を置いているが，あくまで学習内容を習得するための手段であることが明らかとなった。では，イタリアのこうした教科書構成は，どのような考えに基づいているのだろうか。近年に音楽科が必修化されたのであれば，そのカリキュラムはヨーロッパ各国の影響を受けて作成されたと考えられる。したがって，今後はイタリアにおける音楽科の成立の背景などについても，検討していきたいと考える。

参考文献

- Merlo, B., & Taramini, G., *Rondo*, De Agostini, 2004.
- 村上義和『現代イタリアを知るための44章』明石書店，2005。
- 梅根悟『世界教育史大系13 イタリア・スイス教育史』講談社，1977。